

ハーマン・メルヴィルの世界

――その形成と中心課題――

松山信直

I

文学を創造するのは人間である作家だが、作家という人間もまた文学から創り出されて来ることがあろう。創作することに依つて、作家の人間としての自己形成が行われる、というのは決して珍らしい事ではあるまい。Herman Melville（一八一九―九一）の場合が全くそうであつた。一八五一年六月 *Moby-Dick*（一八五一年十月英国、十一月米国出版）を殆ど書き上げていた三十一歳の Melville は、自分の精神的成長について、Nathaniel Hawthorne に次の様に書いて送つた。

「二十五歳になるまで私は全然発展を見なかつた。二十五歳の時から私の人生は始つたのです。その時から今に至る間、如何な時でも、三週間と内的な発展を見ずに過した事はありませんでした。けれども今や私は蕾の最も内側の一片に達し、花が大地に落ちるのも間もない事の様に感じられるのです。」(Jay Leyda, *Melville Log*, p. 413.)

Melville は二十五歳の時に、四年間の南太平洋方面の放浪から帰り、水夫生活の足を洗つて故郷に落着き、放浪の間の数奇な体験である喰人部落滞在を物語として書いて創作生活に入つた。この *Typee*（一八四六年出版）に引続いて、*Moby-Dick* を手がけるまでに、*Omoo*（一八四七年出版）*Mardi*（一八四九年出版）*Redburn*（一八四九年出版）*White-*

Ja-chet（一八五〇年出版）を次々と発表した。だからMelvilleは、創作生活に入つてはじめて精神的成長を見たと云うのである。もとより手紙の表現は極端であるが、要するに作品を書く都度反省・思索が加わり、著しい精神的成長が急速に遂げられた事を云つているのである。彼の中心的傑作となつた*Moby-Dick*の執筆中に、実感として把握されたこの発展は、事実*Moby-Dick*以前の前記初期五作品を通して充分に窺う事が出来る。*Moby-Dick*がMelville文学のpeakであり、思想上の灼熱を示すとすれば、この初期五作品はそこに至る過程であり、Melvilleの自己形成を跡づけるものと云えるであろう。私の小論も、これ等の作品から出発する。

Melvilleの作家としての出発はどちらかと云えば偶然であつた。彼は金を手にする為、自分の放浪生活について聞きたがる人々に読ませてやろう、位の軽い気持で作品を書き、それが意外な好評を博したが為に、遂に創作を職業としてしまつた作家であつて、決して、新鮮な文学論や、新奇な創作態度或は方法を提げて文壇に登場したのではなかつた。勿論、*Typee*を手がけるまでに、文学に対して愛好心程度の関心を持ち、多少の作品をも読んでいたし、二十歳頃には、"Fragments from a Writing Desk"という小論を雑誌に発表したりして、文章に依る自己表現を試みてはいるが、これとても、所謂文学好きの青年のdilettante的行為に過ぎなかつた。好奇な話題を提供しようとする素朴な物語欲――それは兄や友人の刺戟に依る処が大きい様だが――と、物語を売つて金にしようとする生活上の必要が*Typee*を生んだのであつた。従つて、*Typee*の依り処は、話題の面白さ、数奇な点にあるのであつて、彼が範をとつたMungo Parkの*Travels in the Interior of Africa*やC. S. Stewartの*Visit to the South Seas*或はR. H. Danaの*Two Years Before the Mast*などと同じく、事実の記録に外ならなかつた。「旅行叢書」の一冊として売り出されたのもその為であつた。現在では、この「事実」が必ずしも彼の体験に基くのではなく、他からとつた資料もあり、また多少の仮構が織込んである事も明らかにされてはいるが、次作*Omoo*と同様に体験という事実を基幹とした作品である事は否定出来ない。

この様に、*Typee*は、偶然に、しかも単に数奇な素材を依り処として、当時の旅行記に範をとつて生れた作品であつたが、彼の体験や見聞の批判的な把握の故に、当時の同種の作品と明瞭な一線を劃す事が出来る。

彼の体験というのは、世間を喰いつめて来た水夫と共に過した船の生活であり、最も危険と見做されていた捕鯨の血腥い荒仕事、そして、文明を遥か離れた南太平洋の島々での原始生活といつた、陸上の文明社会からみれば、異常な数奇な生活であつた。この体験が描かれる時、それは常に正常な文明社会を背景にして浮び上つて来る。つまり異常なものは常

に正常なものとの対比・相対に於て把握されるのである。南太平洋の原始生活を営む野蛮人を描いても、Melville は常に文明人やその社会を比較対照させる。また、荒んだ船の生活や荒くれた水夫達の世界も、陸上の文明社会との対照に於て描き出されている。この様に、異常な体験が描き出される際に、それが単に情緒的な回想に陥る事なく、正常なものとの相対・対照の関係に於て把握されたのは、彼の批判精神が働いたからであつた。この事は、*Typee* に限らず、彼の体験を基幹とした作品、*Omoo, Redburn, White-Jacket* についても同様に云える事である。これ等の作品に於ける Melville は、確かに物語作家には違いないが、体験を依り処として批判精神を展開して行く批評家（社会・人生の）でもある点に注目すべきであろう。特に *Typee, Omoo* に於ける Melville は文明社会の批評家であり、*Redburn, White-Jacket* にあつては、社会の批評家である以上に、人生或は人間の暗黒面に対する批評家であつたとだけ云つておこう。

II

物語の上では、*Typee* と *Omoo* は冒険的な、romantic な要素に富んだ愉しい作品である。前者は捕鯨船を脱出した「私」が誤つて喰人種 *Typee* 族の部落に入り込み、そこで色々な事を見聞した滞在記であり、*Omoo* は、その部落を脱出して後乗組んだ捕鯨船を再び Tahiti に於て棄て、その島々をめぐり歩いた放浪記である。二つながらエキゾチックな話を、自ら胸をはずませて物語る作者の鼓動が、そのまま読者に伝つて来る spontaneity[1] にあふれた作品である。Melville はこの二つの作品に於て、文明社会の進歩発展に陶酔して忘却し去られた原始性の価値を再認識させ、人間が文明社会の内に求めた地上楽園は、実は非文明界の中にある事実を指摘した。Typee 族の部落は文明社会を遙か離れた彼方に見出された地上楽園であり、*Omoo* の気紛れな放浪は、文明を逃れて原始界に遊ぶ愉しさを描いたものである。Melville は Louis Mumford が指摘した如く、Thorean が意識的に Walden の森に求めた文明の害毒に犯されない世界を、これ等の作品に描いていたのであつた。[2]

この原始性の讃美は、ポリネシア人の讃美として現れて来る。Typee 族の妖精とも云える Fayaway を描いて Melville は次の様に述べている。

> The easy unstudied graces of a child of nature like this, breathing from infancy an atmosphere of perpetual summer, and nurtured by the simple fruits of the earth; enjoying a perfect freedom from care and anxiety, and removed effectually from all injurious tendencies, strike the eye in a manner which cannot be portrayed. (*Typee*, Oxford (The World's Classics) pp. 106-107)

Melville は自然が人間に及ぼす恩恵を見、その恩恵にめぐ

まれて育つ人間の可能性に眼を見張つた。文明の害毒に犯されない人間は、実に清純・純心・廉直・親切である。それは人間性の可能性に対する驚異であつた。Typee 族の世界を見た Tommo はこう語つている。

I will frankly declare that after passing a few weeks in this valley of the Marquesas, I formed a higher estate of human nature than I had ever before entertained. (*Ibid*, p. 254)

けれども、文明の害毒にひしめく人間を見て、彼はすぐその後で、

But alas! since then I have been one of the crew of a man-of-war, and the pent-up wickedness of five hundred men has nearly overturned all my previous theories. (*Loc. cit.*)

とつけ加えねばならなかつた。この悲観的な暗い告白にも拘らず、我々は、Melville が、原始性の讃美を通して、少くとも、人間性の可能性を肯定し、その尊厳と崇高を擁護しようとする態度を示している事を忘れる事は出来ない。*Typee* に於ても、また *Omoo* に於ても、Melville が何故あの様に激しく、素朴な原始民の生活と生命を脅かす白人水夫達の残虐行為や、宣教師達の誤てる伝導を、あく事なく非難攻撃したかは、作中で弁明している「唯単に事実を記す[3]」という態度から生れたものだけではなかろう。

この様な攻撃の根底には、キリスト教文明社会に対する彼の幻滅と懐疑がある。文明社会に対する幻滅は、文明社会と対立する原始社会の讃美称揚にも、また、その原始社会の楽園を描き出す諷刺的表現にも充分云い尽されている。けれども彼の文明社会観は本質的には倫理的であり、キリスト教が支配するにも拘らず悪の存在を許容している事に対して、懐疑を表明したのであつた。

Civilization does not engross all the virtues of humanity: She has not even her full share of them. They flourish in greater abundance and attain greater strength among many barbarous people. (*Typee*, p. 253)

と Melville は書いている。彼が楽園を犯す白人水夫や宣教師達の行為を描く時、彼等の行為は、原始社会に於てより高度に発揮されている人間性の可能性を破壊する文明社会悪の分身として、非難攻撃されたのであつた。

かくの如く、Melville は体験を批判性をもつて再構成し、清教徒的潔癖を見せて悪を指摘攻撃する事に、自己の展開を見出したのであつた。

Typee, Omoo を第一群の体験談とすれば、第二群は *Redburn*, と *White-Jacket* である。

Redburn はその副題に *His First Voyage* とあり、更に、Being the Sailor Boy Confessions and Reminiscences

of the Son-of-a-Gentleman とある様に、Wellingborough Redburn というあどけない青年の初航海記であつて、Melville が十九歳の時の Liverpool 航海を基にした作品である。Redburn は、商航の水夫としての航海の愉しさを夢み、Liverpool の物珍しさに胸を躍らせて船に乗込むが、全くの陸育ちの青二歳の彼は馴れぬ仕事の故に水夫達に馬鹿にされ、また彼のメッカ Liverpool はあらゆる点で彼を失望させる。[4] 即ちこの物語は the initiation of innocence into evil を物語るものであるが、innocence の学んだ経験の多くは、美ではなく醜であり、嬉ではなく悲哀、善ではなく悪であるという点で、人生の暗黒面に触れた Melville の最初の作品となつている。

White-Jacket は、同じくその副題 *The World of a Man-of-War* からして明らかな様に、「白ジャケツ」と綽名された水夫が軍艦生活を物語るのであるが、軍艦を社会の一縮図と見做し、その中に住む人々の生活を社会生活にたとえて描いてある半面、この作品に於ても、*Redburn* に於けると同じく、軍艦生活をする人々にはびこる悪や、非人道的な水夫の取扱といつた暗黒面が手厳しく描き出されている。

これ等の作品も必ずしも体験としての事実に忠実ではなく、仮構と思える挿話が所々に織込まれているが、*Mardi, Moby-Dick, Pierre* に較べればまだ体験談としての域を出ないと見做しても差支えないであろう。然し、Melville の批判性は最早単なる体験の批判的描写に留る事なく、一つの Idea を形成している点に注目すべきである。これ等の作品は、人生・社会が悪をまぬがれ得ぬ事を認知し、その様な人生・社会の悲劇的な暗黒面に、Melville が深い関心を寄せた事を物語るものであり、F. O. Matthiessen がその著 *American Renaissance* 中で指摘した様に、the waking of Melville's tragic sense[5] の形成が明らかに示されている。然し、この tragic sense の覚醒は何を物語ろうとするのであろうか、暫く Melville の描き出すものを眺めてみよう。

Liverpool を訪れた Redburn はスラム街の一室で、餓死寸前の母と子を発見した。その眼には最早訴える力はなく、既に死が宿つていた。その様を見て Redburn は云つている。

> I stood looking down on them, while my whole soul swelled within me; and I asked myself, what right had any body in the wide world to smile and be glad, when sights like this were to be seen? (*Redburn*, L. C. Page, p. 181)

翌朝、再び Redburn がそこを訪れた時、彼等の姿はなかつた。多分死んでどこかに片附けられたのであろうか。Redburn は再びこう独白する。

> Ah! what are our creeds, and how do we hope to be saved! Tell me, oh Bible, that story of Lazarus again,

that I may find comfort in my heart for the poor and forlorn. Surrounded as we are by the wants and woes of our fellow-men, and yet given to follow our own pleasures, regardless of their pains, are we not like people sitting up with a corpse, and making merry in the house of the dead? (*Ibid*, p. 185)

また、Liverpool のドックの壁に立並んで物乞をする乞食の群を見ては、Adam と Eve に呼びかけて、この世の悲惨な光景は親としての苦悩を生むだろうから、May it be no part of your immortality to look down upon the world you have left it. (*Ibid*. p. 189) と云つている。

また Linerpool からの帰途、船上で疫病に悩される移民団を見ては

We may have civilized bodies and yet barbarous souls. We are blind to the real sights of this world; deaf to its voice; and dead to its death. And not till we know, that one grief outweighs ten thousand joys, will we become what Christianity is striving to make us. (*Ibid*., pp. 294-5)

といつている。

要するに Melville は、我々が見て見ぬ振りをする、人生或は社会の暗黒面に注意を喚起すると同時に、同情や憐憫をもつてしても如何ともなし難い悲惨の存在に対して、怒りとも懐疑ともつかない憤満をぶちまける。*White-Jacket* に於ける flogging の刑罰に対する攻撃は、この様な憤満の爆発に外ならない。この憤満を支えるものは、地上楽園を可能ならしめる人間性を守り、その尊厳を擁護しようとする humanism であつた。

We assert that flogging in the Navy is opposed to the essential dignity of man, which no legislator has a right to violate. (*White-Jacket*, L. C. Page, p. 139)

また「白ジャケツ」が Claret 艦長の誤解の為に、flogging の刑に処せられ様とした時、「白ジャケツ」は次の様に云つている。

I felt my man's manhood so bottomless within me, that no word, no blow, no scourge of Captain Claret could cut me deep enough for that. (*Ibid*. p. 263)

ここに云つている the essential dignity of man, 或は man's manhood こそ Melville が人生社会の残虐・悲惨な暗黒面から守ろうとしたものであつた。即ち、Melville は、人間性の尊厳と悪とを対立させる。そして、その悪に犯かされ、脅かされている人間性の危機を悲劇として扱つたのであつた。

Redburn には Melville の最初の創造である悪の化身が登場する。それは Jackson という、片目で頭の禿げた、鼻の曲つた、憎むべき老水夫である。彼は、Redburn が見せつけられた水夫達のありとあらゆる悪徳、例えば profanity, obscenity, indurated cynicism, sneering misanthropy

といつたものの化身として現れる。彼は世の中のありとあるものに呪詛と嫌悪をまきちらす。彼は船上の Timon であり、an atheist and an infidel であり、a horrid desperado であり、a Cain afloat であつた。水夫の死体が青白い焔を上げて燃えた事があつた。眼はカッと開かれて何物かを見据る如く、口はひん曲り、脊せた顔付は生けるが如く硬つていた。そして、顔全体には青い焔がメラメラと燃え上り、狂暴な反抗と永遠の死の相を呈していた。水夫は怖れて物も云えなかつたが、Jackson は平然と死体を処理してしまう。其後誰もこの死体の置いてあつた前部居住区に一人で留り得なかつたが、彼は平気で、その死体のあつた場所を見て笑い、死人を嘲るのであつた。Jackson とはこの様な、神を畏れず、世を恐れず、何物をも信じない悪そのものの塊であつた。この男に Melville は、恐怖と畏敬と神秘のただよう憎むべき悪の姿を見たのであつた。

この Jackson は何も知らない無垢の Redburn を本能的に憎む。Redburn の一言一動が彼にとつては憎らしいのである。悪は本能的にけがれ無き者を憎むというこのテーマは、遺作となつた ***Billy Budd*** の先任衛兵伍長 Clagart が、若くて handsome で、Redburn に劣らず無心無垢の Billy Budd を憎み、彼を無実の罪に陥れようとする本能的悪を想起させて興味深い。Melville が、常にけがれの無い、純真な素朴な人々、例えば Polynesia の原住民の如く、また Redburn, Billy Budd の様な天真爛漫な人間と悪を対決させた処に、彼が特に、人間の可能性という点に於て悪を問題としていた事を知るのである。

しかしながら、Melville にとつて、この様に悪と対決し、それ故に彼が擁護しようとした人間性そのものは、もとより決して本質的に完全であるとは考えられなかつた。人間が外部の悪に抗し得ても、彼自身の内部に存在する悪を認めざるを得ない事をも彼は了解した。***White-Jacket*** の最後の章で Melville は次の様に云つている。

> Our gun-deck is full of complaints. In vain from Lieutenants do we appeal to the Captain; in vain — while on board our world-frigate — to the indefinite Navy Commissioners, so far out of sight aloft. Yet the worst of our evils we blindly inflict upon ourselves; our officers cannot remove them, even if they would. From the last ills no being can save another; therein each man must be his own saviour. (*Ibid*., p. 374)

ここに言及された我々の内部に秘む悪、それは、Melville が世に存在する悪を恨み、その存在を悲しみ、且つその存在理由を懐疑しながらも、認めざるを得ない悪であり、Duch Reformed Church の厳格な空気の中で育て上げられた Melville の総ての思想の核心として残された Calvinistic heritage としての原罪観を物語つている。Melville の批判性は

少くともこの期を最後として、Calvinism を核心とする処の人間対悪の問題へと移つて行くのである。

Ⅲ

一八五〇年八月、Melville は A Virginian Spending July in Vermont と匿名して、'Hawthorne and His Mosses' と題する小論を、友人であり文学上の adviser でもあつた Evert Duyckink の主幹する Literary World の八月十二日号と十七日号に寄せた。これは Hawthorne の *Mosses from an Old Manse*（一八四六）の読後感であると同時に、Hawthorne 論でもあり、また Shakespeare 及びアメリカ文学に対する自身の見解を表明したものでもあつた。ここで Melville は、Hawthorne や Shakespeare の内に、彼の関心であつた人生・社会の暗黒面に光を当てる友を見出したのであつた。それは、彼の言葉を借れば、shock of recognition[6] であつて、彼の体内を、彼等が馳けめぐる事になるのである。

Hawthorne を評して Melville は次の様に云つている。

Spite of all the Indian-summer sunlight on the hither side of Hawthorne's soul, the other side — like the dark half of the physical sphere — is shrouded in a blackness, ten times black..... Certain it is, however, that this great power of blackness in him derives its force from its appeals to that Calvinistic sense of Innate Depravity and Original Sin, from whose visitations, in some shape or other, no deeply thinking mind is always and wholly free. For, in certain moods, no man can weigh this world, without throwing in something, somehow like Original Sin, to strike the uneven balance.[7]

この有名な一節は、Calvinism が、少くとも、彼の人生観の中核にある事を物語ると同時に、悪・醜・悲哀・恐怖といつた、善とか崇高・歓喜などこの世の明るさの背後にある暗さを追求する事——その暗さを意識するのは罪の意識の作用に外ならないが、——こそ、真実を把握する唯一の方法である事を仄していると。事実、同じ論中で、Melville は Shakespeare を評して、その様な事を云つている。

Through the mouths of the dark characters of Hamlet, Timon, Lear, and Iago, he craftily says, or sometimes insinuates, the things which we feel to be so terrifically true that it were all but madness for any good man, in his own proper character, to utter, or even hint of them.[8]

この様な人生の暗黒面、特にその起源である悪に対して払われた異常な関心は、*Redburn*, *White-Jacket* に於て既に示された処であつた。これ等の作品に於ても明らかであるが、Melville は、この世の明るい一面の背後にある暗黒面の強さに眼をみはらずにはおれない。悪あるが故に苦しむ人々に同情せずにはおれない。そしてその悪を憎み、憤らずにはお

れない。もとより、orthodox Christianity にあつては、悪は摂理によつて存在を許されてはいるが、人生の暗黒面の圧倒的な圧迫の下にあえぐ humanity を見て、Melville は悪の存在理由を懐疑せずにはおれない。

この事が Melville の問題の一つであつた事は、第三作の *Mardi* に於て既に示されているといえる。*Mardi* は、*Moby-Dick* 以前の最初の想像的作品で、彼の体験は二義的なものとなつて物語の背景に退き、彼の創造的想像力が、統制のとれぬまま奔放に活動している。もとより *Moby-Dick* 程の洗練さも持合さず（*Moby-Dick* ですら洗練された〔refined〕作品とは云い難いが）、romantic, satiric, metaphysical, allegorical といつた諸要素が雑居し、作品全体は、海を舞台にした *Gargantua* 物語の如く、荒唐無稽な南海物語であると同時に、諷刺旅行記であり、寓話 Allegory とすら云えるのである。

Mardi の島々を、Taji（語り手）の一行は Yillah という神秘的な美女を求めてめぐるが、Yillah はどこにも見出されず、また、彼等を満足させる島も見出されない。が、いくつかの島をめぐつた後で、遂に、Serenia (the land of Serenity) という Alma (Christ を意味する) の倫理が生活の掟となつている島に到達する。この島に、Taji を除く一行は安心立命の Utopia を見出した。そこには僧侶も居ないし、人々を支配する王も法律もない。一切は主 Alma の手に委ねられているのであつた。一行はこの島に満足する。然し Taji は満足する事が出来なかつた。老人の guide が出て来て Serenia について色々と説明する。その説明に一行中の最も懐疑的な哲学者 Babbalanja ですら Serenia に満足する。Babbalanja は夢の中の幻にまでこの Serenia について質問する。その中で彼は "Why create the germs that sin and suffer, but to perish?" とたずねる。この問に対し幻はこう答える。

> "That is the last mystery which underlieth all the rest. Archangel may not fathom it; that makes of Oro the everlasting mystery he is; that to divulge, were to make equal to himself in knowledge all the souls that are; that mystery Oro guards; and none but him may know." (*Mardi*, L. C. Page, pp. 562-3)

Babbalanja はこの答に満足した。しかし Taji は満足する事を得ず、Yillah の姿を求めて白波さかまく海へと舳を向ける。Yillah の探索が、spiritual quest.[9] 或は Ultimate Truth.[10] 或は M. R. Davis の云う様に、[11] 次から次へと絶えず何物かを求める人間性そのものを意味するとしても、Taji がこの Serenia の pristine, purified, undogmatic Christianity を拒否した事は、Melville の Utopia が、Orthodox Christianity に見出されない事を物語るのであり、それが、悪の存在理由への懐疑に端を発したものである事は疑を得な

い。

Moby-Dick の四十一章（'Moby-Dick'）で、Ahab は無類の理智的兇悪さを持つた白鯨に悪の姿を見た。その事を記述しながら Melville は、悪を all that most maddens and tormentes; all that stirs up the lees of things; all truth with malice in it; all that cracks the sinews and cakes the brain; all the subtle demonisms of life and thought. (p. 181) と換言し、「近代のキリスト教徒ですらも、全世界の半分は、その intangible malignity が支配する領域だと考えている」と述べた。この、この世の半分は悪が支配するという考え方は、F. O. Matthiessen が述べている様に、悪は摂理によつてのみ存在を許されているが、特に Calvinists が直面する「罪との暗い戦いの場は、実際局部的に存在する悪の領域を認めている」[12]事を示したものであつた。

どちらかと云えば Catholic の立場に立つ Geoffrey Stone は、

> The Calvinist distrust of the world and flesh stands as evidence of the Manichaen bent in all provinces of Calvinist thought and activity, and a dualism often exaggerated to a pathological extreme may be assumed to characterize the Calvinist mind.[13]

と述べている。悪の強烈さ、強靱さに眼をみはり、その悪の跳梁する暗黒面の力を認めざるを得なかつた Melville が、先述の如く、この世は善悪二つの領域に分たれるという二元教的傾向に傾いた事は当然だつたと云える。*Moby-Dick* に登場する Fedallah が、善悪二元教の Manicheeism の始教 Zoroarter の一派の Parsee であるのは決して偶然とは考えられず、Melville が二元教の立場をとる東方宗教に可成りの関心を持つている事を物語つている。Millicent Bell の云う処によれば、Melville は一八四九年の三月か四月初旬に買つた Pietre Bayle の Dictionary を読んで、Zoroastrianism とか Manicheeism について学んだという。[14]

Zoroaster の唱く処では、世界は光と火の善神である Ahura-Mazda (Ormuzd 全知の神) に依つて創られたが、暗黒と悪の神 Ahriman が来つて彼を脅かし、世に害毒がもたらされる。人間はこの善悪の戦の焦点に立ち、世界は善悪二つの神の戦場である。Zoroaster は善神を勝利に導く為につかわされ、かくて最後の勝利は善神のものとなる、という。Zoroastrianism にしても、Manicheeism にしても善神の勝利と同時に救が約束されている。Melville が関心を持つたのは、これ等の教義が主張する善悪二元説のみで、その善神の勝利に関してではなかつた。

Melville の関心は矢張り Christian 的であつた。むしろ、Calvinism の問題が、そのまま Melville の問題であつたとさえ云えるであろう。Calvinism にあつては、神は全宇宙を

支配する arbitrary and absolute will[15] であつて、一切は神の意志によつて決定され、救に入れられる者も、滅びにおとされる者も、ことごとく、人間自らの内的な可能性に基くものではなく、神の絶対的な自由選択によつて決定される。この運命予定説にあつては、人間は、神の意志により決定論的に選択し賦与された自己の運命から脱却する事は全く不可能であり、従つて、決して a free soul[16] ではなく、また罪深き人間の完全性など考うべきでなく、魂の尊厳や価値などを語るは無礼極まるものであつた。人間は文字通り the worms of the dust[17] に過ぎず、恩恵に予定された者が自己の運命をみずから誇り得ぬ如く、滅亡に選ばれたものも自己の運命について告訴する事は全く不可能であると考えられた。むしろ、呪詛の運命を悲しみ嘆く人々の慟哭こそ、そのまま神の全能を讃美する声にすら変奏されることだろう、と考える。この様に、人間の運命を決定する決定的要因が、神の絶対的な意志にのみあるとすれば、人間は救の確かさ certitud salutis について如何なる保証を持ち得るか、という問題が起つて来る。Calvinist にあつては、「神のみに対する真摯な畏怖」と、「自己の罪に対する恐怖」の自覚を生む処の心の誠実さ——良心に於てのみ救は与えられる。然し、先述した様に、Melville にあつては、悪の存在は二元教の教える如く殆ど絶対的であり、何人もそれから逃れられないと感じたのであつた。この様な運命を開拓する事が果して可能であろうか。神の与えた運命（Predestination）に反抗する自由意志（Freewill）が許されるであろうか。そして救は？　一八四九年十月、ロンドンに渡る船上で Melville はドイツ人の Adler という乗客[18]と、Fixed Fate, Free-will, fore-knowledge absolute について語つたという。これ等の主題が Melville の関心の中心にあつた事は云うまでもない。そしてそれはまた *Moby-Dick* 或は *Pierre* の底流ともなつているのである。

IV

この様な Melville の関心は、云うまでもなく、orthodoxy に懐疑の眼を向けてはいるが、唯単に orthodoxy を否定しようとする為の懐疑ではなくて、彼自身の精神的救（信仰と呼んでも大同小異であるが——）を見出さんが為の探求に於てあらわれた懐疑である。悪の存在理由を糺し、運命の糸をときほぐし、そこに自由意志の無限の可能性を見ようと試みる彼の speculation は、少くとも、全能の神の業の神秘を解き明そうとするのに外ならなかつた。その神秘解明の努力に於て、Melville は彼自身全能になろうとする。その結果がどうなるのか、また、果して神秘が明かされるのか、それは彼自身の知る処ではなかつた。それでも尚その神秘は明らかにされねばならない。Melville は、事物の現象面の彼方にある意義を探り出そうとする speculative な傾向に、扁執

的にとらわれていた。「あらゆるものにはある意義があるのだ、さもなくば万物は無価値である」[20]と *Moby-Dick* の Ahab 船長は云うが、*Mardi* の懐疑哲学者 Babbalanja の関心もその様な意義の解明にあつた。

I am intent upon the essence of things; the mystery that lieth beyond; the elements of the tear which much laughter provoketh; that which is beneath the seeming; the precious pearl within the shaggy oyster. I probe the circle's center; I seek to evolve the inscrutable. (*Mardi*, p. 305)

と彼は云つているが、これこそは Melville の関心の核心を衝いた言葉に外ならない。彼は一切の妥協を排して「事物の本質」の究明、「事物の彼方にある神秘」の解明に没入する。その態度は、復讐の一念に凝つた Ahab 船長や、Taji が Yillah を求める態度と、何等異る処はなかつた。

And though essaying but a sportive sail, I was driven from my course, by a blast resistless; and ill-provided, young, and bowed to the brunt of things before my prime, still fly before the gale; — hard have I striven to keep stout heart.....

But the fiery yearnings their own phantom-future make, and deem it present. So, If after all these fearful, fainting trances, the verdict be, the golden haven was not fained; — yet, in bold quest thereof, better to sink in boundless deeps, than float on vulgar shoals; and give me, ye gods, an utter wreck, if wreck I do. (*Mardi*, pp. 437-438.)

この熱烈な探究は、Melville の、精神面に於ける frontier spirit を雄弁に物語つている。既知の世界を去つて、未知の世界に新天地を開発・開拓しようとするアメリカ勃興期の情熱が、対象こそ異つてはいるが、希望にあふれた楽天的時代主潮とは、どちらかと云えばそぐわない Melville の内に見出されるのは興味深い事である。Ahab 船長とはこの様な情熱的探究精神から生れた人物であつた。Ahab にとつて、白鯨は無限の真理を包み隠す仮象の壁であり、彼はその壁を貫いて事物の核心を探ろうとする探索者である。[21] *Moby-Dick* の解釈について、多くの人々が多くの見解を述べて来たが、松本政治氏の見解は傾聴すべきものがある。氏は *Moby-Dick* の象徴面を研究した小論に於て、「白鯨は、単一なる善でも悪でもない。其は、善神、神魔、治乱、明暗、美醜など一切の対立的要素を包蔵しつつ宇宙に遍在する摩訶不思議、不可知なる力、即ち神の叡智の現れである。Melville は、この明暗二相を有つ宇宙原理の謎を解かんと苦悩するのである」[22]と述べている。Melville の世界観が Manicheeism 的傾向に陥つていた事は、白鯨の諸性質に見られる対立的要素の錯綜に充分窺う事が出来よう。Melville は、善悪・美醜といつた対立的要素が同時的に存在する宇宙の神秘——それは神の叡智であり、事物の現象面の背後にある真実であるのだが

——を解こうとするのである。先に少し触れた Hawthorne and His Mosses の中で Melville は、'I seek for Truth.'[23] という人、それが Hawthorne であると云つているが、Melville の Hawthorne にはらわれた尊敬は、人生の暗黒面に辟易せず、その中に真理を探究する人としての Hawthorne に対してであつた。即ち、Melville にとつて、総て真摯な、自己を偽らぬ人は、a seeker, not a finder yet.[24] であらねばならなかつたのである。*Moby-Dick* は Melville のこの意識から生まれた探究の書なのである。

さて、この神秘のヴェールをはぎ、その中に無限の真理を介間見ようとする Melville の探究は、既存の orthodox christianity の宇宙体系に満足し得ず、人間の位置づけの基礎となる神を再発見しようとする努力を意味するものであつた。何故ならば、全宇宙に巍然と自己を主張して立つ人こそ永遠無限の真理の国に入り得る人なのであつて、その様な自己を確立・主張するという事は、在来の彼の位置づけの基礎となつていた神を離れ、その様な自己の位置づけを可能ならしめる神を求める事を意味するからであつた。そしてかくの如く自己を主張して立つ時、如何に全宇宙の神秘にとりまかれていても、彼と神は同等の立場に於て対決するのである。一八五一年四月の Hawthorne に宛てた手紙は、こういつた Melville の態度を述べたものであつた。

He [the man who.....declarles himself a sovereign nature (in himself) amid the powers of heaven, hell, and earth] may perish; but so long as he exists he insists upon treating with all Powers upon an equal basis. If any of those other Powers choose to withhold certain secrets, let them; that does not impair my sovereignty in myself; that does not make me tributary. And perhaps, after all, there is *no* secret. We incline to think that the Problem of the Universe is like the Freemason's mighty secret, so terrible to all children. It turns out, at last, to consist in a triangle, a mallet, and an apron, — nothing more! We incline to think that God cannot explain His own secrets, and that He would like a little information upon certain points Himself. We mortals astonish Him as much as He us. But it is this *Being* of the matter; there lies the knot with which we choke ourselves. As soon as you say *Me*, a *God*, a *Nature*, so soon you jump off from your stool and hang from the beam. Yes, that word is the hangman. Take God out of the dictionary, and you would have Him in the street. (*Portable Melville*, pp. 427-8)

かくの如く Melviller は自己の信仰を求めつつ正統信仰から離れていつた。かといつて、無神論者になり切ることも出来なかつた。彼の探求は絶えず疑懼につきまとわれていた。Melville 的探求の人物は、*Mardi* の Taji にしても、*Moby-Dick* の Ahab 或は Pierre にしても、窮極に於ては an

utter week に終る。Ahab は "Fool! I am the Fate's lieutenant: I act under the orders." (*Moby-Dick* p. 554) という事実を知るに至るのであり、Pierre もまた His soul's ship foresaw the inevitable rocks but resolved to sail on, and make a courageous wreck. (*Pierre*, Hendricks House, 1949. p. 398) という状態を脱れ得ず、遂には the fool of Truth, the fool of Virture, the fool of Fate (*Pierre*, p. 422) である事を自覚するに至るのである。Melville の主要作品 (*Mardi, Moby-Dick, Pierre*) に渦巻いているこの Fatalism. 宿命的 pessimistic な世界観は、人間の infallibility を否定し、絶対的な神の意志を肯定する所に生れる原罪感に源を発したものと云う事が出来よう。Melville 文学は、anti-orthodoxy の探求精神という Romantic Idealism と、Calvinistic sense of Innate Depravity and Original Sin の葛藤・相剋の上になり立っている。その相剋の波にもまれる Melville を pessimist と呼ぶ事は簡単であるが、彼は本質的には seeker であり、seeker であつたが為に陥つた scepticism の故に、pessimist と呼ばれるのである。彼が烈しい Idealism にとりつかれて後に到達した seeker としての境地は、次の如きものであつたろう。

Life is a long Dardenelles, My dear Madam (Sophia Hawthorne), the shores whereof are bright with flowers, which we want to pluck, but the bank is too high; & so we float on & on, hoping to come to a landing-place at last — but swoop! we launch into the great sea! Yet the geographers say, even then we must not despair, because across the great sea, however desolate & vacant it may look, lie all Persia & the delicious lands roundabout Damascus. (Melville to Mrs. Hawthorne, Jan. 8th, 1852. *Portable Melville*, pp. 456-457)

この言葉こそ、Melville の心の真実を物語るものではなかろうか。

この様に、体験から出発した Melville は、批判性によつて、客観的静的事実の世界から、speculation の世界へと入り込んだ。彼の知覚するものは、何一つとして彼に speculative な価値を与えずにはいなかつた。そして悪の存在を中心にして、彼は「事物の本質」「事物の彼方にある神秘」解明と取組んだのであつた。そこに示された彼の Manicheeism 的色彩の濃い pessimism、新しき神の再発見は、orthodox christianity からの脱出を意味するのであつたが、人間の自由意志を窮極に於て否定せざるを得なかつた彼——If the will was free, as the new faith insisted, Melville knew that it was free to do evil as well as to do good.[25] ——は、結局無神論者にもなり切れなかつた。Hawthorne の云う様に、彼は believe し得なかつたし、また unbelief に安住する事も出来なかつた。[26] 昏迷の世界に唯一人已が燭を

掲げて、結果のあやめも分らぬ探索に従わねばならなかった人、Melville の姿は、また、近代人の宿命の姿でもあろう。

註

1. Newton Arvin, *Herman Melville* (Am. Men of Letters Series) p. 79.
2. Lewis Mumford, *Herman Melville* (N. Y., Harcourt, 1929) p. 68.
3. *Typee* (The World's Classics) p. 250. *Omoo* (The World's Classics) p. 192.
4. Newton Arvin, p. 103.
5. F. O. Matthiessen, p. 396.
6. 'Mosses from an Old Manse' Willard Thorp (ed.), *Herman Melville, Representative Selections*. p. 339.
7. *Ibid.*, 332-333.
8. *Ibid.*, p. 334.
9. Lewis Mumford, p. 51.
10. Tyrus Hillway, 'Taji's Quest for Certainty' *American Literature* XVIII, p. 33.
11. M. R. Davis, *Melville's Mardi : A Chartless voyage* (New Haven, Yale Univ. P., 1952), p. 199.
12. F. O. Matthiessen, p. 439.
13. Geoffrey Stone, *Melville* (*Great Writers of the World*), p. 4.
14. Millicent Bell, 'Pierre Bayle and '*Moby Dick*,' *PMLA* vol. 66. p. 628.
15. V. L. Parrington, *Main Currents in American Thought*, one volume edition, p. 13.
16. *Ibid.*, p. 14.
17. *Ibid.*, p. 15.
18. *Journal of a Visit to London and the Continent, 1849—1850*, (*Portable Melville*) p. 388.
20. *Moby-Dick* (Hendricks House), p. 427.
21. *Moby-Dick*, p. 162. cf 松本政治「白鯨 Moby Dick の研究——主としてその象徴面について」(武庫川学院女子大学紀要第二集) p. 17.
22. 松本政治, p. 17.
23. Willard Thorp. *op. cit.*, p. 341.
24. *Loc. cit.*
25. F. O. Matthiessen, p. 458.
26. Jay Leyda, *Melville Log*, p. 529.